

『日本アジア研究』第10号（2013年3月）

山の奥の奥まで入所勸奨は追いかけてきた ——ハンセン病療養所「星塚敬愛園」聞き取り——

福岡安則*・黒坂愛衣**

ハンセン病療養所のなかで60年ちかくを過ごしてきた、ある女性のライフストーリー。

山口トキさんは、1922（大正11）年、鹿児島県生まれ。1953（昭和28）年、星塚敬愛園に強制収容された。1955（昭和30）年に園内で結婚。その年の大晦日に、舞い上がった火鉢の灰を浴びてしまい、失明。違憲国賠訴訟では第1次原告の一人となって闘った。2010年8月の聞き取り時点で88歳。聞き手は、福岡安則、黒坂愛衣、金沙織（キム・サジク）、北田有希。2011年1月、お部屋をお訪ねして、原稿の確認をさせていただいた。そのときの補充の語りは、注に記載するほか、本文中には〈 〉で示す。

山口トキさんは、19歳のときに症状が出始めた。戦後のある時期から、保健所職員が自宅を訪ねて来るようになる。入所勸奨は、当初は穏やかであったが、執拗で、だんだん威圧的になった。収容を逃れるため、父親に懇願して山の中に小屋をつくってもらい、隠れ住んだ。そこにも巡査がやってきて「療養所に行かないなら、手錠をかけてでも引っ張っていくぞ」と脅した。トキさんはさらに山奥の小屋へと逃げるが、そこにもまた、入所勸奨の追手がやってきて、精神的に追い詰められていったという。それにしても、家族が食べ物を運んでくれたとはいえ、3年もの期間、山小屋でひとり隠れ住んだという彼女の苦労はすさまじい。

トキさんは、入所から2年後、目の見えない夫と結婚。その後、夫は耳も聞こえなくなり、まわりとのコミュニケーションが断たれてしまった。トキさんは、病棟で毎日の世話をするうちに、夫の手で夫の頭にカタカナの文字をなぞることで、言葉を伝える方法を編み出す。会話が成り立つようになったことで、夫が生きる希望をとりもどす物語は、感動的だ。

トキさんは、裁判の第1次原告になったのは、まわりから勧められたからにすぎないと言うけれども、その気持ちの背後には、以上のような体験があったからこそであろう。

キーワード：ハンセン病、隔離政策、ライフストーリー

わたしは、からだの調子が悪くなっちゃって、もう、目もまったく見えませ

* ふくおか・やすのり、埼玉大学教養学部教授、社会学

** くろさか・あい、埼玉大学非常勤講師、社会学

なお、本稿はJSPS KAKENHI Grant Number 22330144（2010～12年度科学研究費補助金基盤研究（B）「ハンセン病問題の《集会的な語り》の記録化の追求」、研究代表者＝福岡安則）の研究成果の一部である。

んし。〔右の〕足も平成17年に切り落としたりなんかして、歩くこともできなくなっちゃって。〈いまはもう、ほんと、この万年床の上で生活してますよ。もう、ゴソゴソ、四つん這いに這いずりまわってあれしなきゃ、おトイレもよお行けないしね。そんだから、這って行って、介護員さんがたの手を借りて、なんとか用を足すことができます。〉

あたしは敬愛園に来て57年になりますけど、どっことも敬愛園から出たことないんですよ。近いところに、バラ園があつたりするんですが、そこにも行ったことないですわ。そんだから、世間からも、いよいよなんにもわからない、取り残されて、ただ1人の世界でこうして毎日を過ごさせていただいております。

わたしは、大正11年〔の生まれ〕です。今年、米寿でした。〔米寿の祝いには〕ふるさとのイトコが2人来て。ほて、弟の子どもたちが兵庫県におりますので、1人、甥御が来てくれました。

〔わたしのふるさとは〕鹿児島県の伊佐ちゅうとこ。〔うちは農家でした。田畑は〕あたしところは、そんなにたくさんはありませんでした。4反くらいでしたかな。戦時中なんか、ほんと供出、供出で、自分が食べるお米もあんまり残されずに、一生懸命……。食糧難で、その当時は、どこも大変でした。

〔学校ですか？〕それは恥ずかしくて言えません。あたしはもう〔尋常高等小学校の〕途中でやめました。そのころはもう、戦時中でしたからね、勉強どころじゃなくて。学校の田んぼが少しあつたりして、生徒も2人で肥料を担いだりして、一生懸命そんなことをしたり。勉強のほうはもう〔二の〕次でしたね。

あたしは頭がよくなって。アハハハ。〔勉強は〕好きじゃないですよ。体操は、まあまあ、嫌いのほうではなかったです。

〔きょうだい〕ほんとうはねえ、5人きょうだいでしたけど、小さいとき早よ死んだのがおりますので。〔大きくなったのは〕弟と姉が1人〔ずつ〕おりましたが、その弟もここ2、3年前、亡くなりました。

執拗な入所勧奨を逃れるため山奥に小屋を

〔わたしがこの病気に〕自分自身で気づいたちゅうのは、19歳の末ごろでしたかなあ。眉と眉のあいだの、小鼻っついでいいですが、ここに薄赤あいのが、ちょっとできてね。母が、「おまえは、そこに変なのができたねえ。タムシだろう」ちゅってね。田舎の人たちの昔からの生活の知恵といいですか、タムシだったらネコヤナギの枝（あれ）を、ちょっと生（なま）を取ってきて、火にあぶって、湯呑の底にね、こうして立てて。油が出るから、それを付ければ治るがちゅう。ほんとにそれを付けたら治ったですわ、そのときはね。やっぱ、ハンセン病のはしりだったかもしれせんけどね。そんなことぜんぜん考えないし、わからないし。それからあれしだしたのは、顔を洗ってタオルで拭くとき、睫毛（まつげ）が1、2本ずつ付いてきたりして、なんか2、3年するうちに、薄う一くなってきました。それでおかしいちゅうことになったんです。

〔その当時は「無癩県運動」っていうのが盛んで〕もう、まったくしらみつぶしで。いろんなどころへまで、山奥まで。それこそ草の根を分けてでも探し回って、収容（あれ）しようとしてね。もう徹底しておったですわ。

やっぱり、「人の口には戸を立てられない」ちゅうような調子で、誰か彼か

が、どこかでか、しゃべったりなんかして、人から人に伝わって。そんなのが、自然自然に、保健所あたりにも伝わって、そして〔うちに訪ねて〕来るようになったんじゃないでしょうかね。ほんだからもう、わたしも、なあんてこんな、いろいろ来て、あたしに、ああだこうだち言わなきやいけなかなあと思つて、不思議に思ってたんですよ。最初は、なんにもわからないもんで。

最初はね、2人ぐらい来て、女の人がね、何気なし、二言三言、お天気の話やらなんやらして。療養所に行けとかなんとかそんなことも言わずに、ただ、「あなた、からだ具合が悪いですなあ」ちゆうような調子で、やわらかく話が出てきてね。なんだろうなあ、あんなこと言いに来て、なんかあたしにおカネでもくれるのかなあと思つちよつた。真っ白な予防着を着て来たもんで、なんのため来たかなあと思つて。庭に立ってて、家の中に入ってこないで、ちよつと話して。そして「また来ますわあ」ちゆうて帰って行かれて。

それからまた、2、3ヵ月してからでしたかなあ。こんどは、また2人ぐらいね、人が替わって来たですよ。その人たちも、それとなく遠まわしみたいな話でね。「どっか具合が悪かったら、治療のできる場所がありますから、言うてください」って、こんなような調子で言って、それで帰って行かれたんですが。だんだん、半年とか1年とかち、あいだが遠おくなって、また替わった人が来る。そんで、何回も来られるうちにね、「あんたは、家族なんかと一緒におれない病気だから、いい治療するところがあるから行かないか」言うてね。「行って、治療しなさい。そしたら、2、3年したら帰ってこれますよお」とかなんとか言うて、説得(あれ)されたんですが。だんだん何回か来るうちにね、「あんたの病気は人にうつる病気だから、家族と一緒に暮らすこともできない。他人(ひと)にうつしたら罪になる。家族にうつしても罪になる」とかち、人が替わって来るたんび、そういうふうに高圧的な話になってきて。それから、どうもおかしいなあと思つて。

で、「家族と一緒にいると家族にうつる」「家族と一緒にには暮らせない病気だ」って、あんまり言われるもんだから、「お父さん、それだったら、わたしは山の中へでも行って住むから、山に小屋を作ってください」ちゆうてねえ、お父さんに言った。たら、「おまえじゃ、一人で山の中で暮らせるもんか」ちゆうて。「わが家で家族と一緒におれないんだったら、そうするしかないから」ちゆうて。いやあ、まあ、昼晩泣いて父にせがんで。そして、山に小さな小屋を作ってもらって。で、〔隠れて〕生活(あれ)しておつた¹。

¹ 補足の語り。「〔小さな小屋って、間口と奥行きが〕1間半と2間。まあ、ちよつと土間を取ったり、囲炉裏を掘ったりね。台所はね、山ですから、ちよつと土をのかしたりすると、水がどんどん出てきますよ。だから、水は心配なかった。洗い物をするでも、御飯なんかを炊きたけりゃあ、御飯も炊けるし。弟が兵隊に行つて帰つてきたとき、ほら、兵隊さんが御飯を炊く飯盒(はんごう)、あれがあつたから、飯盒(あれ)をわたしは山に持っていつてね。それで、たまには自分で炊いて食べたりしましたけど。あんまり、昼の日中(ひなか)に煙だしたりするのは〔見つかるのが〕怖いから、夜、炊いたりね。まあ、父と母が交替で山に来てくれたから。わが家からは、提灯を灯(とほ)して出てくるわけいかんもんで——ひとに気付かれるからね——、わが家を、夕方ちよつと薄暗くなる前に出て、山に入って、途中で提灯を灯して、小屋

あるとき、巡查さんが来てね。そして、庭に立ってて、小屋の中に入って来ないで、「おまえは、あこの療養所（びょういん）に行かん、行かんちゅうて、粘ってばっかりおると、手錠かけてでも引っ張って行くぞ」っち、その人が言うてねえ。まあ、それにわたしは驚いて。こりゃあ警察まで来て、なんていうことかねえ。あたしは悪いこともした覚えもないのに、えらい変なあれだなあとって、もう不思議でたまらんでねえ。自分がハンセン病で法律上とかかなんとか、そういうことがまったく田舎者でわからんでしょう。それで、変なことばかり来て言うと思って。それから、またお父さんに、「もう、ここはいかん。もっと奥に、作ってくれ」言うて、また小屋を奥のほうにね、作ってもらって。

そうこうするうち、〔最初に山小屋に住んでから〕3年経ちましたよ。3年したら、またやってきてね。誰が教えたもんか、その山奥まで。6人か7人だったですよ。そして、「あんたがいくら逃げて、コン山奥に逃げて、全国う、そんな病気をしてる人、どこまで逃げて、逃げのぶことはできない」と。「よその山に逃げて、山探しするから、逃げのぶことはできないから、もう療養所に行け！」ちゅうてね、もうどうにもこうにも、なんか、袋の中のねずみじゃないけど、追い込まれてしまって、精神的に。もう、どうも逃げ場がないなあと思って。そして、いよいよ泣きながら強制収容されたんですよ、ここに²。昭和28年3月13日、ここへ来ました。31〔歳〕で来たんです。

までやってきよったですよ。夜泊まって。朝帰るときも、暗いうちに提灯灯して、そして、ちょうど、わが家の近くに来たとき、提灯は火を消して、それで帰ったりね。そうして、人目（ひとめ）を避けるようにして来てくれました。〔うちから〕山まで、測ってみたことないけど、1里はなかったでしょうかね。登り、下りが、山道は多いですからね。登り下りも暇が要りますわ。」² 『ハンセン病違憲国賠裁判全史 第6巻 被害実態編 西日本訴訟 (I)』(2006年、皓星社)に収録されている、熊本地裁での平成12年5月11日の法廷での本人尋問の記録「本人調書」によれば、山口トキさんは、このような執拗な入所勧奨を受けた体験にもとづき、以下のように主張している。「私は平成8年に予防法が廃止だということをテレビや新聞やラジオなんかで聞いて、『伝染力はそんなに強い病気じゃない。治る病気でした。間違っていました。家族や国民のみなさんにお詫びします』と、時の厚生大臣の菅直人先生がおっしゃったことを、目では見えませんが、テレビで言うのを私は耳で聞きました。それならば、なぜ、あれほど深刻に私は苦しんで、親も子もあれほどの苦労や心配や、本当に言葉では言い尽くせないほど家族が苦しんで、悲しんでしたものを、なぜ、もっと早く、このことを説いてもらえなかったかと、それと、国は私をああいう山奥まで行かなければならないようなふうにおっしゃってしたものを、蛇が蛙を狙ったみたいにして連れて来られたんですから、それほど怖くない病気であつたら、今度は国のほうが、偏見、差別を無くするために、草の根を分けてでも、私はその偏見、差別を津々浦々、一軒家に到るまで無くしていただきたいちゅうのが、私の強い思いでございます。」

なお、トキさんに「この、一軒家に到るまでとは？」と尋ねたところ、即座に「奥山の一軒家までちゅうことね」と返事がかえってきた。

山奥に隠れる前は、野良仕事や踊りの稽古も

〔その前は〕ハンセン病ちなっているんだらうけど、からだの具合が悪いとか、きついか、そんな自覚症状（あれ）がないもんで、一生懸命、野良仕事に専念（あれ）してましたけどね。弟が1人おりましたけど、まだ若あい、17、8ぐらいのあれで、徴用が言うてきて、福岡の炭鉱までやらされたり。特攻隊なんか行かないのは、そういうところにやられたりしてましたよ。で、弟も19ぐらいで召集令状が来て。昔は20歳（はたち）で〔徴兵〕検査があつて、22歳ぐらいで兵隊にゆく時代だったんですよね。戦争なってからもう、年齢に関係なく、国が男の子なんかね、特攻隊にやらせたりしてました。だからもう、わが家は、あたしがいなけりゃ……。父と母ももう、だいぶん歳とってましたし。

姉は結婚してましたけど、美容師でした。髪結い。それで、迎えに行つて、鹿児島で空襲に遭（お）うてね。そんなときあたしも命からがら姉とふたり逃げて帰ったんですが。鉄道線路なんかも、爆弾で、こーんなしてひねくれてねえ。真っ赤なつて。汽車も走れない。バスも走らない。もう裸足で、鹿児島から伊佐まで、3日かかって帰ったことがありますよ。乗物（のりもん）ならその日に帰りつくものをね。それでもう、野宿したりして、アハハ、帰りました。その当時はもう、店屋で買うつたつて、買うものがないんですよ。おカネがあつても品物がない。飴ひとつ売つてあるところはなかったですもんね。それで、田舎の家に入つて行って、「水を飲ましてください。あたしたちは空襲に遭つて、こうして帰るところだ」。お茶をもらつて飲んだり、水をもらつて飲んだりね、そんなことして帰りました。いまねえ、言葉でこんなしてお話ししますが、とてもじゃないが、あの時代は大変でした。その日その日生きるのと、逃げ回るのが、いちばん大変（あれ）でしたねえ。

〔戦争がひどくなる前ですか？〕わたしなんかのところ、ほんの片田舎で、あれでしたけど。やはり、よそから踊りの師匠さんとか三味線の師匠さんとか、食糧難の時代じゃもんじゃで、田舎のほうが、いろいろ手に入つたり、ほら……。だから、そんな人たちが田舎に泊まりこんで、年ごろの娘連中が、踊りの稽古をしたりね、しましたよ。民謡とかね、いろんな演歌とか、股旅物とかね、あんな踊りを、アッハハハ、教えてもらつたり。田舎にやあ特別の娯楽（あれ）がないから、お田植えが終わつた「田植え上がり」ちゅうてね、部落みんな、お煮染めを作つたりして、公会堂に集まつてね。おじさんおばさんたちが一生懸命歌つて、娘連中は踊つたり。〔楽しみは〕そのくらいでしたよ、田舎ではね。

戦争中は奉仕奉仕の毎日

〔戦争がひどくなつてくると〕若者が少なくてね。どこの家でも残つてる者は年寄りと女子どもだけでしたよ。だから、あたしたち17、8のころはもう、あつち奉仕、あすこに奉仕ちゅうて、部落で青年団が決めてね。秋は稲刈りとか採り入れ、そういうことに奉仕。きょうはあすこの家、あしたはどこの家ちゅうて、そういうふうにしなつたら、わが家はわが家で、忙しかつたですよ。そんでねえ、もう1時間の時間が惜しくて、わが家のは、月夜の晩に稲刈りをしたり。灯（あかり）も、石油とかあんなのは、ぜんぶ配給でしたから。下手に焚きよつたら、足らなくなつてね。そんで、あたしなんかのところは片

田舎だった、電気がまだ来ませんでしたし。それで石油ね、ランプを焚いてしよったんですが。いやー、もう、とてとても、言葉じゃ言い尽くせない。目に見てみなきゃわかりませんよ。

〔終戦の日ですか？ 覚えてますよ。〕ラジオなんか、めったになかったですから。他人（ひと）の話でね、敗戦（それ）を聞きました。〔知ったときは〕あれ、悔しかったですな。あれほどみんな、国民も兵隊さんも、おなじように苦労して。兵隊さんが、戦地に行って、鉄砲玉をあれしながら、一生懸命、難儀するから、国民も、一生懸命しなきゃいけないちゆうことで。いやー、まあ、朝から晩まで、一生懸命でした。もう若者も、子どもも、みんな、手と暇があれば、もう手伝い。よそのうちの奉仕。もう、兵隊に行ってる家族がほとんどでしたからね。あとには年寄りと女子どもばかり。大変でしたね、農家は。だからね、やっぱり、みんなもう、戦争に負けたちゆうことがわかったら、ほんともう、それこそ泣きべそかぶった顔をして、悔しい思いしたことがありますね。学校に行く子どもでさえも、勉強どころじゃのして、仕事ばかりさせられた時代でした。戦争中はねえ。

ムラの年寄りたちは嫌わなかったけど

〔わたしは戦争が終わる〕ちょっと前から、眉毛が抜けたりいろいろしてきた。しかし、昔の年寄りの人たちは、それがハンセン病だって知ってたかどうか知りませんがな、みんな、嫌わないで、あたしがお茶汲んでも、お茶も飲んでくれるし。あたしが切ったお漬物でも食べてくれるししてるもんだから、あたしもわりかし平気な顔で、そうやってひとさまにお茶あげたりしてたんですがなあ。

そのう、田舎でね、野良仕事なんか、下ば一っかり向いてするもんだから、顔がね、すかばれてきたり。かと思ったら、わが家でお風呂入ったりして、ゆっくりするとまた、その、すかばれも減ってね、あれしよったんですが。「すかばれ」ちゃあ、ちょっとこう、ぶ一っつと腫れるようなふうにな。でもまた、いっときすると減るんですよ。で、あったかいとこやなんかで仕事すると、顔が真っ赤になってね。木の陰でいっとき涼んでいると、自然と赤みがとれてね。そんな調子でした、ハンセン病は。まあ、しかし、変な病気であることはあるもんですなあ。ほで、わが家でたった1人、あたしだけがこの病気で。他にやあ、ほんとに、父も母も、きょうだいにも、だあれもないのに、あたしが1人、こんな病気になってしまっ。だから、なんであたしだけがこんなンなったんかと思って、あたしは父に、「お父さん、誰かほかにも、親戚かどっかにおったのか？」ちゆうて聞いたら、「バカなこと言うな、おまえは。そんなこと言うと、ご先祖にバチが当たる」。父に叱られたことがありますわ。

それで、あたしの本家のおじさんが、役場に勤めちよったからね。「なんでおまえばかり、そんな病気（あれ）になったんかねえ」ちゆうって、そのおじさんもほろほろ言いよったですよ。まあ、ほんとは、あたしがひとり、よっぽどなにか、前世でなんか悪いことしたんかなあと思って。

敬愛園から収容バスが連れに来て

〔昭和28年の3月には〕敬愛園（ここ）のバスが、伊佐（あこ）に〔連れに〕来ちよったですよ。そしたら、あたしが1人だと思ったらね、おなじ伊佐の人

ですけど、女の人が、あたしより2つ3つ上かなあって思う人が、もう1人ね。あたしと2人、ここへ来たですよ。〔家族はだれも〕お父さんも付いて来なかったです。その女の人とね、もう1人、だれか男の人が乗ってたようでしたが、あれは、役場かどっかの人だったんでしょう。

夜、ちょうど7時ごろでしたかな、ここに着いたのは。そしたら、お風呂場から先に連れていかれて。して、お風呂場から出たら、まあ、いっっぱい、ここの中の患者さんたちが外に立って。「新収容が来た」ちゅってね。そしたら、手えのまあ……、あたしもいま曲がってるけど、来たときは手はどうもなかったんですよ。もう、こんなンなって。火傷をしたりして、爪もぬけて。——その、こんな手えの人やいろいろおって、びっくりしましたよ。sonだから、ハンセン病ちゅうのは、ほんと、大変な病気だなあと思って、わたしも驚きました。

〔収容された日の診察ですか？〕あの一、お風呂から上がるのを待ってて、先生がね、からだのいろんな診察をね、裸にいるところ診察されたりして。女医さんでしたけどね。〔松田なみ先生です。〕もう、あの先生も遠く亡くなられたですがね。——〔先生は〕なんとも言わずに、ただずうっとね、背中を診たり、前のほう診たりして。手を診たり足を診たりされまして。

〔松田先生は「2年もすれば、治って帰れるよ」とか〕そんなふうにな、まあ、慰めの言葉だったかどうかは知りませんがね、そういうようなことをおっしゃいました。で、あたしがここに来るとき、連れに来られたのは、6人か7人かでしたが、若い男の先生も一緒でしたよ。看護婦さんが2人ぐらい。そしてあと、男の人たちがね、何人かおって。で、ここへ来てみてはじめてわかったよ、山奥まで連れに来た人たちは、ここの職員でした、全員。〔事務〕別館におる人たちが多かったですよ。まあ、いろんなことがありました。男の先生が、わざと、よれよれの背広を着て、地下足袋はいてね、田舎の労働者みたいな恰好して、いちばん先の小屋に来られたこともありました。ここへ来てそんな話をしましたら、「ああ、その先生はもうここにはない。北海道のほうに行った」ちゅってね、ほかの患者さんたちがそういうて聞かして。看護婦さん2人は、いつきおられましたか、どっか転勤だったか、辞められたのかわかりませんが、いなくなりました。

園内で結婚した夫も強制収容で

〔ここへ入ったとき〕「みんな偽名してるんだから、あんたも偽名しなさい」と。「印鑑も、その偽名の印鑑を彫ってきてやるから」って言われて。で、みんながそうするちゅうから、しなきゃいけないんだろうなあと思って、あたしたちも頼んだんですよ。〔わたしの偽名は〕三杉トキ。ここで1、2年して結婚して。そして、主人とおなじ三杉になって。「名前が別々だったら、ややこしいから、夫婦者は、偽名なら偽名に、一緒にしてくれ」ちゅうことでね³。

³ 山口トキさんの「陳述書」（前掲書所収）によれば、トキさんは当初は「村上」という偽名を名乗り、結婚するときに、夫と一緒に「三杉」の偽名にしたということである。『皆〔偽名に〕しよる。そうせんと、世間にばれるから』と言われてね、しょうがなく、『村上』と名乗った。縁もゆかりもない名前さあね。／不思議でしたよ。病院なのに、なんで本名が名乗れないか。

主人は、宮崎県の延岡の生まれでね、学校おわってから満州へ行って、満州で警察の試験受けて、それで警察〔官〕になって。それで、むこうで2年ぐらいですかあ、はっきりしたことはあたしもよくわかんないけど、勤務（あれ）してから、このハンセン病になつたらしいですよ。ほで、ふるさとの宮崎に帰ってきて。まだ戦争が終わりきっていないころですからなあ、主人もあっちこっちしよったら、汽車の中で捕まっちゃったち。——わが家に病人がいてね、姉さんが。あの、結核かなんかで。それで、ほかの姉さんがお嫁さんに行つてるところから、「お正月が来るから、米やらお餅をあれするから、取り来い」ちゅう手紙が来て、そしてそれを取りに行つて帰る途中で、汽車の中で捕まつて、途中下車させられて。昔はねえ、山の中に、赤痢患者とかあげな人たち入れる避病舎（ひびょうしゃ）ちゅうのが、どこでもあるものでしたよね。で、そこに、もう、やぶれかぶれになつたような小屋があつて、草ぼうぼうしたところに一晚寝かされたつて。「あした、宮崎県のハンセン病患者をたぐさーん敬愛園に連れてく。一緒にそんとき汽車に乗せて連れていくから、一晚、ここへ寝れ」ちゅうてね。山中の小屋ン中、一晚寝かされたつて、言うたですよ。ほで、その米も餅も、わが家に届けることもできないで、強制的、連れてこられたちゅうてね、主人もそう言っちゃつたですが。

火鉢の灰で失明

わたしなんかはねえ、〔ここへ来て〕しばらくは収容病棟（しゅうようじょ）におりまして、〔1 ヲ月ぐらいしてから〕女性寮ばかりのところがありましたから、そこに入れられました。「桜寮」ちゅうところでしたな。あたしが来たときはねえ、1人は病棟に入室してらして、1人だけ、あたしなんかよかちよつと年上の方がいらして。そうこうするうちに、1年あとにもう1人、新収容が入つてきてね。で、3人、12畳半におつたんです。〔病棟に〕入室した人は、入室する前にもう、結婚だけはしておられたそうすわ。そんで、退院するときゃ、桜寮（へや）のほうに下がつてこんで、夫婦部屋のほうに下がつて行かれました。

〔治療ですか？〕あたしはね、〔プロミンの〕注射を2、3回打つた。もう、とつても吐き気がきてね、そん注射をしたら。そしたら、松田先生が「あんた

……／昭和30年に結婚してからは、今度は『三杉』と名乗つたんだ。それは、夫が相撲取りの若三杉が好きだったことと、夫の本名の一字である『三』が入っているということで、この名前を付けたんだ。／少しでも故郷とつながりのある名前、だけど故郷にも迷惑がかからない名前という気持ちだったようだね、夫は。」

補充の語り。「〔夫は〕あたしと一緒にいる前は、本名だったらしいですよ。それで、あたしと一緒になつてから、『三杉』ちゅう偽名（あれ）を作つて、ふたりとも『三杉』を使おうちゅうことになつたんです。なぜ一緒にならにゃいけなかつたかちゅうと、自治会が配給物なんかがあるとき、夫婦で別々な名前していると、配給するのに面倒きたすから、一緒の名前にしてくれ、ちゅうことで、『三杉』をふたりとも名乗つたわけですよ。そして、平成8年に、いまの菅直人総理大臣が『ハンセン病〔の患者を〕強制収容したのは国の間違いだった』ちゅうことを言われたもんで、本名に還つたんですよ。」

には注射は合わんから、丸薬のほうを使いましょう」ちゅってね、DDS ちゅうのを飲まされたですよ。[DDSで] まあ、落ち着いたちゅううんでしょねえ。あたしは結節とかあんなのはあんまり出ませんでした。結節の出た人は顔やらどこやらいっぱい出ちよったですもんね。この病気、もうねえ、重おい人と、中ぐらいのひと、軽ういひと。結節らいとか〔神経らいとか〕いろいろありましたね。あたしの場合は、「混合らい」ちゅうのかなんちゅうのかわからないけど。はい。でも、神経らいちゅうのはね、眉毛が抜けなくって。男の人たちがよく、そんな顔の人がおりましたが。眉毛もあって、顔も髭がいっぱいあってね。ただ、手えと足が悪かったですよ。結節らいちゅうのは、眉毛も抜けて。そして、手は、あんまり曲がってなかったですがね。

あたしは〔病気は〕もうこれ以上はね、悪化（あれ）しませんでした。ただ、この手えがね、来たときは伸びてたのに、火傷をして。もう何回と火傷して。爪も抜けてますよ、ほら。ほんで、こんなふう指が曲がって不自由になったんです。目も見えなくなってしまう。目え、何年ごろでしたかなあ。[昭和] 30年の大晦日の晩でしたなあ。その当時は、火鉢でしたよ、どこの部屋も。夫婦寮も、独身寮も。それで、炭をワンワン、こう、火をおこして、やかんに入水を入れて、五徳（ごとく）に据えようちするとき、火鉢の縁（ふち）に、お茶を注いで一杯、置ちよったのをひっくり返して、それが天井まで噴き上げて。あたしが五徳に乗せるちゅう瞬間と、それがフサアッと〔噴き上げるの〕合（お）うて、あたしの目にその灰が入って。火傷をして、目ん玉。大晦日の晩にそうなるって、元日の朝、もう見えなくなりました。角膜がもう全部、真っ白になってね。

右目（こっち）は、もともとね、白内障があったんですよ。ここに入ったところで、眼科の先生が、女医さんでした。光田健輔さんちゅう人の娘さんでね。光田健輔さんちゅう人はね、らい病の対策（あれ）を国に訴えた人ですよ。〈日本にハンセン病がこんなにはびこってあれするちゅうのは〔国の〕恥だから、療養所を何ヵ所か作って、そこに隔離収容するように、国のほうで法律を作ってくれっち、そう国に言うたらしいですわね。〉その人の娘さんでね。結婚してらして、まもなくご主人は召集令状が来て戦死かなんかされたとか聞きました。その先生は、あたしが「白内障の手術していただけないですか」ついたら、「あたしは、気が向かないと、しないわよお。わたしは、あんたがたのお守り役ですからねえ」って、呑気そうにこんなこと言うて。そうしてるうちに、左目（こっち）のほうがそういうことでね、火傷しちゃって、いよいよ見えなくなりましたよ。もう、いまは真っ暗です。雷がどんなに光ってもわかりません。雷がゴロゴロ鳴りだしてから、びっくりするんですよ。

[昭和] 30年の8月、9月だったかしら、結婚して。そして、間もなく、そういうことになったんですよ。主人も目が見えなかった。あたしは、こんなこと言ったら恥ずかしい話ですが、恋とか恋愛とかそんなんじゃないで、主人は目が見えなくて、〔片方の〕足も義足で不自由だったもんで。で、まあ、結婚してくれないかちゅうことだったから、あたしは、ほんとに、こう言っちゃいけないけど、同情した結婚でした。主人はまた、神経痛の激しい人でね。もう夜も夜中も、2、3回は、〔治療を〕頼みに⁴。いまみたいに、部屋とか〔不自由

⁴ 補足の語り。「[当時は] お医者さんは、処方を出してくれるだけ。[そのこ

者] センターに電話なんてなかったんですよ。そこの下の病棟の道路の脇に、こうして回す電話でしたよ。そこまで来ないと、[治療] 頼めなかったんですよ。ほんで、そうこうしてあれしよったら、誰かが「電話が欲しいなあ。病棟にもどこにも、個人のところへも欲しいなあ」ちゅうて訴えてくださって、そして、各部屋も電話を取り付けるようにしてもらって、いまがあるんですよ。わたしもそこに黒電話を持ちますよ。[わたしは] 目が見えんし、手が悪いから、ボタンを押すとかどうとかいうのはできません。[電話のダイヤルを] 回すのはね、介護員さんが回してくれるの。むこうから来たのは受話器を取ってこうするだけだけど。こっちから掛けるときにね、介護員さんの手をお借りしないとできません。

目も見えず耳も聞こえなくなった夫との会話を求めて

だからね、そういうことで、しよったら、こんどは、昭和43年、4年ごろ、激しい感冒が流行って、何人も何人も死んで逝きましたが。主人もそれに引っかけかかって、危ないもんだから、もう11月でしたが、「いつか[病棟に]入室すれば、早く治るから、正月にはお部屋に帰ってこれるだろうから、入室したほうがいいんじゃないね」つってあたしが言ったら、「入室は不自由だから行きたくないねえ」って言いよったんですが。看護婦さんたちも「行ったほうがいい」ちゅうて言われて。そうして行ったら、だんだんだんだん激しくなって肺炎になっちゃってね。もう熱が激しくて、着物をいま着替えても、もういつときも経たんのに、着物がびっしょり汗かいてね、絞るぐらい。お医者さんたちが「もうこら、とてもダメじゃろうなあ」ちゅう話があったらしいですよ。なんとか救う手はないかなちゅうことで、ストマイ、カナマイという注射を打って。そしたらこんだ、耳がぶっつきかなくなってね、主人が。これで、くったり困ったんですよ。目が見えないし、耳がぶっつきかなくなって、なんぼ耳の傍(はた)で大きな声言っても、通じない。これは困った。「先生、なんとか聞こえる方法はありませんか？ 手術かなんかありませんか？」「ダメ。できないな」。もう、そういうふうに言われて。これは困った。でも、言葉だ

ろは] 療養所もいい加減でしたからね。技工室の技師とかね、レントゲン室の職員(ひと)とかね、それから、むこうの消毒場に働いてる職員(ひと)たちとか、夜、9時から先は、そういう医者でも看護婦でもないひとが異状回りをしたりね。そして、電話が、そこの病棟の脇に1つだけあって。『注射を出してください』って言い、その電話に行くんですよ。それが遠いんですよね、部屋からは。そこの下の、病棟の角まで来るのに。雨のふる日とか風の強いときとか、ほんとに辛かったですよ。もう、神経痛が、主人はひどくて、一晩に2度も3回も。冬なんか、とても大変でした。注射をね[頼む]。神経痛のひとはもう、ほとんど、注射でしたから。[で、注射してくれるのも、お医者さんじゃ]ない。いまだったらやかましい[けど]ね。[当時は]医者の資格のないひとが注射をしたりね。まあ、ちょっとした傷なんかを治療したりするひとがおったんですよ。むかし、兵隊に行って、看護兵だったひととかなんとかって聞いたことがありますね。ほんとお医者さんでないひとでも、メスを握ったりね、いろんなことをしたりして。いい加減だったんですよ、たしかに。悪く言えばね。」

けは言うのははっきりこっちに伝わるわけね。だから、なんとか会話ができるようになったらいいんだがなあ、と。「なにが欲しい、なにが欲しい」っち、「あったか、なかったか」っち聞かれるんだけど、「ない」っち言っても、聞こえないわけですよ、相手に。だから、あたしは、こら困ったなあ、もうこのまま会話ができないとすりゃ、どうしたらいいかなあ、と思って。で、耳鼻科の先生にまた「何とかありませんか」っち言ったら、「ダメじゃなあ。目が見えない上、耳が聞こえないちゅうことは、脳のほうに伝わらんから、もうこのまま、言葉も忘れてしまうかも」って言われてねえ。それからあたしは、なーんとかして、会話ができる方法はないものかと思って。〔夫は〕6年間〔病棟に〕入室しちよったのですが、毎晩毎晩あたしは3時間ぐらいしか寝らずに、介抱してやっただんですが。夜中に本人が汗かいたりなんかするもんで、拭いてやったり、タオルを胸に入れて取り換えたり、そんなことしてたら、そうだなあ、もともと文字を知ってるんだから、文字を何とかならんかなあちゅうことを、フツとね、思いついて。まず背中に文字を書いてみよう。わかるかもわからんと思って書くけど、漢字では伝わらん。背中を一生懸命、文字を書くかっこうをすると、マッサージかなんかしてくれるかと思って、気持ちよさそうな顔をしてるんですよ。こらいかなあ、背中ではダメだ。頭の後ろに書いたらわかりやせんかなあと思って、書くけど、それもわからん。やっぱり気持ちよさそうな顔をしてるもんだから、こりゃあいかんかなあと思って。でもまあ、一生懸命、わかるかわかんないけど、やってみようと思って、書いて。そしたら、どうしてもそれが伝わらん。あんまり、死ぬか生きるかの病人をしょっちゅう起こしたり寝かしたりもできないし。で、寝たまんまで、こんだ、本人の手を握って、「ト、キ」ちゅって、こうやってね、「コ、コ、ニ、イ、ル」ちゅうことを何回も書いたら、勘にきたですよ⁵。

そして、わかるようになって。「なあんだ、おまえもそこにおったか」。本人の言葉はこっちにはっきり伝わるわけですよねえ。「誰か先生が〔看護に〕付けち言ったか」っち言うてね。最初1人で〔病棟に〕入院したもんだから、あたしが付いてるちゅうこと、知らなくてね。それで、「先生が付けて言ったか。おれはそんなに病気が重いか」っち言いだしてね。もう、こりゃあ困ったなあと思って、あれしよったけど。もう、言うたって聞こえないもんだから、「違う」とか「いや」とかちゅうのは、こういうふうに合図して、会話をしたり。そういうふうにして、本人の手で〔書くこと〕で、「あたしが付いて

⁵ 補充の語り。「〔夫は〕仰向けに寝てるの。きつそうでした。60キロぐらいあった体が痩せて、もう、軽くなって。それで、起こしたり寝せたり〔するの〕本人がきつそうだったから、寝たままで、そうだ、本人の手で書かせたほうがわかりはせんかなあ、っち思って。で、わたし〔の手〕もこんなになってるもんだから、寝たままでの本人の手を両方〔の手〕で握って、それで〔頭に〕『ト、キ』って、こうしてね、書いて、『コ、コ、ニ、イ、ル』って書いたら、それから、勘にきだしたですよ。はい。それからもう、ひと言、ふた言、書いたら、先を読みよったですよ。勘は早かったです、わかりでしたら。それで、〔看護婦が書く〕『いま書いたのは誰の字だ』ち、もう字の形までわかるようになったんですよ。それでも、看護婦も婦長さんも驚いたんですよ。」

いる」ちゅうことをわかってからはね、ちょっと一言二言書けば、先を読みよったですよ。勤は早い人でした。それで、こんだ、誰でも書いて会話ができるようにちゅうて思って、起こさずに、寝たままで、頭(こっち)の横のほうにも書いて、わかるようにしちよいたほうがいいなあと思って、あたしは、こんだ、頭(こっち)の横のほうにも書くようにして。片仮名がわかりやすかったですよ。大きく書いてね。でも、たまには片仮名でも、ちょっと、わかりにくい文字がありますよね。「マ」とか「ヌ」とか「ス」とかね。

そいでね、〔夫は〕相撲と野球が大好きでしたから。「いまあ、何月か？」何月っち、こう、字を書いて。「ほんなら相撲が始まってるだろうが。いま、どこ部屋の誰は何勝何敗してるか」っち、そんなの聞いたりね、本人もしよったですわ。で、「野球は、いま、どことどこがやってるか」。いよいよ、「新聞に書いてあるのを教えれ」ち言うようになってね。看護婦さんたちも、昼の時間に暇があるとき、新聞を見ては教え、見ては教え。そして、看護婦さんが、相撲〔取り〕の名前、いろいろ字があるもんで、「この字はなんて読むの？」ちゅうて、字でまた書けば、「そりゃあ、これこれちゅうて読むんだが！」ちゅうて、「目も見えん、耳も聞かんおじさんに、文字を習いよったよ」ち、看護婦さんが言うて。アハハハハ。その会話ができるようになってから、生きる希望を持ってね。そうして、それから毎朝、お茶飲むときは、枕崎の鯉節と、味噌をすこうし入れて、そうして飲ませよったです。それから、食欲も出てきたしね。

先生がたがもうダメじゃろうっち、匙投げちよったらしいけどね。〈〔本人も〕「おれは、おふくろが海のむこうのほうから船に乗って、手招きした夢を見たよ」っち。もう、ほんとにね、ダメだちゅうて、お医者さんがたの話し合いがあったちゅうことは、看護婦さんがたからちらっと聞いたんですよ。あたしが側にいるちゅうことがわかってから、「おれは目も見えない、耳も聞こえない。死の世界にいるのと一緒だよ」ちゅうて、涙をポロポロだしてね、あれしたんですけど。会話ができるようになってから〉10年生き延びましたね。それで、昭和54年に亡くなりました。

夫の葬式には夫の家族はだれも来ず

〔夫の葬式には夫の家族は〕来てくれません〔でした〕。生きてるときから〔夫は〕「おれが死んでも、ぜったい延岡の家族に知らせるな」ち言ったけど、〔夫が〕この世を去って〔しまえば〕もう二度と会うこともないのに、なんぞ言わずにおれるものかと思って、あたしは電話したんですよ、探して。延岡の電話〔帳〕を持って人から借りて。そして、「延岡にはM家ちゅうのは、おれんとしかない」ちゅうて、主人がかねがね言ってたもんで。ないかなあ、あるかなあ、と思って、見たら、あったですよ。M姓が2,3あったですよ。それは、〔夫の〕兄さんの子どもたちが、それぞれ、嫁さん持ってね、家庭も持ってるもんだから。――で、あたし、主人の友達の人に、兄さんの昔の友達だったというような嘘ついて電話をしてもらってね。「2,3, M姓が載ってるから、どれかに間違いないが」ちゅうて。したら、兄さんの息子さんにちゅうど電話が通じて。「ああ、ぼくの父ですが。ほんなら、お父さんにつなぐから」ち言うてくれたちゅうて。こんどは、あたしが代わって、「MT ちゅうもの、あたしは家内ですが、臨終に近くなった。もう、あれだから、来て、一目

(ひとめ) 見てください」っち、あたしは言ったの。ただ、その兄さんもちょうど脳梗塞かなんかでね、寝て、動けないっちゅうことで、来れなくて。で、お悔やみをね、おカネを、送ってくださった。「すまんけど、そっちで葬式をしてくれ」っち言われてね。だけどまあ、あたしは、それを一言でも知らしてよかったと思ったですよ。ンで、その兄さんが、「[わたしの弟の] Tはどこにいるか？」って。知らんよ、療養所にいるっちゅうことを。主人もたった1人、ハンセン病なって、他には[家族で] 誰も[この病気] した人がおらんもンで、特にきょうだいなんかは、世間に知れんように、[Tが] ハンセン病だちゅうことを言わずに、隠しちゃったんじゃないですかなあ。お母さんだけが1人、知ってたらしい。そいでもう、主人もな、「最後にいっぺん、逃げて帰って、1年ばっか、わが家におって、そして、また来る時、母が都城まで送ってきて、敬愛園(ここ)まで行こうちゅうたけど、こんなところ、おふくろなんかを見るところじゃないから、ここから帰れちゅうて、都城から帰したよお」ちゅうて言いよったですが。——まあ、そういうねえ、いろんな過去の話混ぜこぜに、あっちゃこっちゃ、アハハハハ。すみません。[わたしの話は] 取り柄のない、摺みどころがありませんけど。

まあしかし、ねえ、先生、人間ちゅうのは、なんとかならんか、なんとかならんかちゅう一心に、やっぱ、天の与えだったろうっち、あたしは、あのとき、ほんともう、胸いっぱいになりました。その、文字を書いて会話ができないかちゅうことを、思いついたっちゅうことがね。とてもあたしぐらいで、そういうことを考えつくような能力もないのに、それが、そういうふうを考えさせてもらったちゅうことは、天が教えてくれたんだなあと思って、あたしは、ほんと、そのときは、もう胸いっぱいになりましたよ。

昭和30年でも夫は断種された

【目を悪くする前は、患者作業は何をしたか、ですって?】あたしは付添いしました。病棟の付添いしたりね。いまみたいにこんな機械道具がありませんでしたから。冷蔵庫もなければ、洗濯機もない。掃除機のあるものもなかったですよ。だから、梵天(ぼんてん)で一生懸命、廊下を拭いたりなんかしてね⁶。ベッド掃除したり。それで、女の入室者の患者さんのね、朝、病棟に行ったら、頭から、先、梳(と)いてあげて。いまみたいにパーマじゃない[から]、髷(ま

⁶ 補充の語り。「[梵天って] 木にね、長い釘をいっぱい打って。それにこんな長い柄(え)をすげてね。そして、患者が使った包帯を、洗濯場で洗って消毒して、このくらいずつ切ってね、そして、その釘にしっかりくくりつけて。抜けないように。それ、濡らして、廊下を拭きよったんですよ。それは、重たくて重たくてね。モップはまだ軽いでしょけどね。梵天は、木にくくりつけた包帯がこのくらい長く伸びて。で、それを洗っては、廊下拭きですよ。何本も作って、こっからここまで1本、あこからあこまで1本って、ずうっと廊下の脇に並べておいて、そして、使っただけこっちへあれしよって、最後ののも全部終わったら、まとめてまた、風呂場で洗ってね、しよったんですよ。もう、そりゃあ、自分たちの生活する部屋も、病棟も、おんなじ梵天を使って掃除をしよったんですよ。だからもう、それから掃除機がでてきたりあんなのが出てきて、難儀をせんですみよったんですよ。」

げ)を作ってね。そんなことしよったですよ。

[結婚して、女子寮から夫婦舎に移りました。]もう、あたしのときは雑居じゃなかったです。[夫婦の]部屋は、8畳でしたかな、6畳だったか、もう、古うーい昔の家でね。どこそこ壊れたようなところでした、最初は。で、後から、不自由者の夫婦寮ちゅうのができて。あたしが目が火傷して見えなくなったもんだから、松田なみ女医さんやら他の先生やら来て、「そんなに、ふたりとも目が見えなくなったら、大変だろうから、不自由舎に行きなさい」ちゅって、そして、夫婦寮の不自由舎に入りました。

[昭和30年の結婚だと、男の人の断種はもうなかったか、ですって?]ありましたよ。わたしの主人も[されました]。みんなが「もういまごろは、そんなこと、するはずはないが」ちゅったけどね、医局から連れに来て、看護婦さんが。「ちょっと診察がある。先生が、出てこいっち言われたから」ちゅうて連れに来てね、行ったですよ。で、ワゼクトミーされたんでしょう。もう、抜き打ちですよ。

[この療養所のなかでは]もうほとんどがねえ、妊娠[すると]子どもを産ろされて。医局のほうかどっかの隅っこに、ガラス瓶に、その赤ちゃんをねえ、[ホルマリン浸けに]してあったらしいです。

[目が見えなくなって、それに慣れるまでの苦労ですか?]あー、なんて言えばいいですかなあ。とても不自由で、われながら自分自身が歯がゆくて。思うようにならないもんでねえ。読み書きができなくなったり、針どりができなくなったりでね。とても、大変でした。しかしね、見えなくなってからまた2年ぐらいしてから、少うーし、白とか赤とかが、ぼうっと、わかってきました。[でも、はっきりは]見えはしなくて。もう[それ以上]よくなりませんでした。大ざっぱなことはなんとかできるようになりましたよ。そしたらまた、主人が肺炎を起こしたりなんかして、病棟で、毎晩、6年間、3時間ぐらいしかわたしは寝てません。それで、やっぱり、目に障って、また見えなくなりました。もう、それっきりでした。洗濯して干そうと思っても、どっちが頭か裾(すそ)のほうかわからなくてねえ。看護婦さんたちが、「あんたのすること見てたら、ヒヤヒヤするから、干してあげるわ」ちゅうてね。看護婦さんに干してもらったりしましたよ。主人の付添いしながらね、[その]過労からまた、右の目は見えなくなったんでしょう。その後、「どうしても、熊本へ[転園治療に]行ってこい。[おれは]病棟にいるから、行ってこい」っち、主人が言うて聞かんもんだから、熊本の菊池恵楓園に1回行きましたけど、ダメでした。——いまは、その都城に、いい、宮田眼科がありますが。その当時は、[目の手術は]菊池恵楓園に行かないとできなかったですよ。

夫について天理教に

[わたしは宗教は天理教です。信者になったのは]ここに来て[から]。あたしの実家は、先祖代々、東本願寺の仏教ですよ。主人も、昔ながらの日蓮宗だったらしいですが。ここじゃ、天理教に。それがなんでかちゅうと、お父さんも警察官で、台湾に渡っててね。そしてみんな、子どもたちは台湾で生まれたらしいですわ。ほて、小さいとき主人もなんか熱が出て、悪い風邪だったかなんか知らんけど、あっちこっち大学病院やらお母さんが連れてって診察して。もうお医者さんにダメだって言われてあれしたら、病室におばさんがおって、

「坊ちゃんがかawaiiそうだと思うなら、天理教のあれを、騙されたと思って、信心してみないか」っち言われて。そしてお母さんは、わが子のかawaiiさに、その天理教の教会（あれ）が台湾にもあったちゅうから、そこをお参りしよったら、嘘みたいに、一枚紙（いちまいがみ）はぐように、主人が日に日に元気なったらしいですよ。小さい、ほんの子ども、赤ちゃんに近いころでしょうなあ。それがあったから、「この病気になって、おふくろになんにも恩返しもできんかったから、せめて、親孝行のために、天理教に、ここで入ったんだ」って言いよったですよ。〔そしたら〕天理教の人らがあたしまで帳簿に載せてしもうて。アハハハハ。やむを得ず、あたしも天理教に。いまだに、やっぱりお祀りがあるときは、お供えだけでもと思ってね。

あたしは、天理の本部に行ったことないですが、もう、大祭（あれ）があつときは、天理市〔では〕郵便局も、駅員も、警察も、みいーんな、〔天理教の〕法被（はっぴ）着てするんだって。あの、天理大学の学生（せいと）がここに1年に1回来ますよ。あたしのうちにも来る。

父親は84歳まで面会に来てくれた

〔入所してからの家族との関係ですか？〕手紙のやり取りはできましたよ。でもねえ、なかなか、面会に来ても、〔わたしの〕部屋に〔家族が〕泊まったりすることは、園が、その当時はね、嫌いよったんですよ。「部屋に上がるな」とかね、「子どもなんか連れてくるな」とか、いろんな規制（あれ）がありましたよね。いまはもう、そうでないから。自由自在にね、子どもでも誰でも来て、部屋に泊まったり、一緒に食事したり、そんなことが自由にできるようになりましたけどね。わたしが31歳で来た当時はねえ、なかなかやかましかったですよ。面会が来たちゅうとね、それはそれはもう、園長先生が、くるくるくるくる、回って来よったですよ。裏を回ったり、前を回ったりしてね。子どもなんか家の中おったら、もう、やかましかったですよ。

面会はね、父が84歳まで来てくれました。母は、父より10年さき亡くなつてね。弟が兵庫県におつて、会社に勤めてたから、いつか〔父を自分の家に〕連れて行っちゃったけど、どうしても田舎者は田舎がいいらしくて、「都会は緑もないし、空を見たら曇つて、あんなとおつたら長生きせんが」ちゅうてね、ほいでもう、「どうしても田舎へ帰る」ちゅうて聞かんで、弟が帰したんですよ。そしたら、〔田舎には〕おばたちがおるもんだから、おばたちがなんかかんかし、買（こ）うてね、あたしに持たしてやったりして、父が面会来よったですよ。お雛祭りの3月の節句ね、〔それから5月の〕端午の節句とかね、父が面会に来てくれよったですよ。84歳なるまで来たから、「もう、来ないでくれ」ちゅうて、あたしがね。「汽車に乗ったり、車に乗ったり降りたりして、怪我したりしたらもう、大変（あれ）だから。手紙で、やり取りができるんだから、もう危ないから、来ないで」って。そしてもう、父はそれから来ませんでした。

第1次原告団のひとりとして頑張った

〔裁判ですか？〕熊本地裁に行きました、あたしは。平成12年のね、5月11日が、本人尋問（あれ）でしたから。そして、ちょうど、まる1年、明けの年、〔平成〕13年にね、判決があつて。ちょうど、まるまる1年でした、あたし

が〔法廷に〕行ってから。

それで、あたしは自動車に弱くて。あたしはもう、熊本に行くときも、このくらいのバケツを抱いたまんま、6時間ばかり、行きも帰りも、こうしていたんですよ。だからね、勝訴〔判決〕のときはもう、熊本には行きませんでした。こっちで弁護士の先生が1人、来ていてくださって、田中民市さん、まえは荒田重夫さんちゅう偽名でした〔けど〕、あの人とあたしとが、2人で、ここの本門の外でね、熊本〔地裁〕で〔判決が〕あったとき、旗を振って、テレビで全国放送をしたんです。そのころねえ、自治会がもう〔園と〕グルになっちゃって、あたしたちの国賠訴訟に、も一のすごい反対したんですよ。

あたしなんか9人、後から12、3人になって、〔違憲国賠訴訟の〕火ぶたを切ったんですよ、星塚が。そして、そのなかで、あたしも、熊本にまで、そんな自動車に弱いのに行って。それで、ちゃんと裁判官の前で訴えて。して、まるまる1年目に、判決があった。そのとき、ここの園内では、公会堂も貸せない、どこも貸せないちゅう、自治会がものすごい反対したんです。いまの自治会長やら、当時（まえ）の自治会長ね、もう亡くなったけど。そんな人たちに反対されて。それでもわたしたちはもう、一寸（いっすん）も聞かんで、本門の外に出て。そして、鹿児島の〔テレビ局が〕来てね、熊本と、こう、つないでね。で、あたしは田中民市さんとバンザイするところを〔放映してもらったんですよ〕。

〔裁判に勝って〕もう、うれしかっちゅうか、感無量でね。ほんともう、胸が詰まったですよ。それが、わたしごときみたいなもんが行って、裁判の法廷で立たにやいかななくなっちゃって。あれはもう、ほんとに、何がどうなったやら、自分で何を言ってたか、訳わからなかった。アハハハ。

〔わたしが第1次〕原告〔のひとり〕になった理由ちゅうのは、あたしがどうこうじゃなくて、男の人たちが、島比呂志さんちゅう人が最初立ち上がって、そして、田中民市さんとか、豎山〔勲〕くんとかね。窪田〔茂久〕さん、上野政行さんとか、男はそのくらいで最初はあれして。女としては、あたしと、上野正子さんと、玉城しげさん、3人が、その中に入っちゃったわけですよ。もうそのころ、田中民市さんの奥さんは、病棟でね。ご不自由でした。で、民市さんも一生懸命、夕方になりゃあ奥さんを車〔椅子〕に乗せて、このへんの後ろの道路を行ったり来たり、散歩をさせてね。そっちのほうも大変でしたよ。だから、あたしたちもその、面白半分でやったわけじゃなくて、どうなるかなあ、こりゃあ、と思ってね。もうほんとに、心のなかじゃ、こんなことをしていいのかねえ、女が。ましてや、わたしのような不自由なもんが、その中に入り込んで……。わたしが入るちゅうたんじゃなくて、「入ってくれ」ってみんなから勧められて、入ったんですよ。わたしのようなおっちょこちょいが。ほんとに、大変でしたよ。裁判の法廷へ立ったときも、もう、何がどうなったのか、どう言えばいいのか、わかんなくて。頭ンなか、内も外も真っ白でした。アハハハハ。

それはね、大分の徳田靖之ちゅう弁護士の先生が、「トキさん、どうしても、あんたが気張ってくれンにや困る。いままでもあれしたけど、ちょっと危ないような気がする。あんた、頑張ってくれんか」ちゅう。「なんで、あたしが行ってあれすればできるちゅう保証もなんも、あたしにはわかんないのに」ちゅうたら、「あんたが行ったほうがよか」ちゅうて言われて。それで、〔熊本地裁

まで] 行ったんですよ。

徳田先生は一生懸命あたしたちのためにね、[何度もここに] 来て。泊まるのも患者の部屋にね、泊まって。ほんとにもう、先生に申し訳ないようなあれで。「泊まる所も貸せない。話をする公会堂も貸せない」ちゅうて、自治会と園がもう、こう[反対の立場に] なってね。それでも聞かずに、一生懸命頑張ったんですよ。で、その徳田先生ちゅう人は、「わたしは、あんたたちの病気のことで裁判が負けたら、法廷で灯油かぶって自殺するかって思ってた」ちゅうからね。そのくらい、徳田先生は涙もろい人でね。泣いて語る人でしたが。いまもねえ、年に1回か2回、かならず来てくださいますよ。[今年も]「夏祭りに行くからね」って言って[たけど]、今年は納涼大会がなかったですよ。宮崎県の牛やら豚の[口蹄疫の]問題で、お祭りが休み、飛んでしまっ

て。
[裁判勝って] 変わったといえば、理解者が広がって多くなったちゅうことでしょうか。それ以外には、まあ、いまはね、ここの患者の元気な人たちは、あっちこっちに行くですよ。それはもう、役所のあたりでも理解して、嫌わずにあれして、行かせてもらってますよ。

[星塚敬愛園の将来構想の問題ですか?] うーん、ちょっとなあ。まだまだはっきりした青写真(あれ)がな、[出てこない]。自治会長も人任せみたいなどころがあるから、あれですがなあ。まあ、どうなればいいのかちゅう[ても]、わたしたちここまで、こんな無様(ぶざま)なかつこうになってから、何をどう考えようもありませんが。われわれはどうなるのかなあと思って、心配はしますよ。看護師さんなんかは減るちゅうことはあんまりない、というふうには話は聞いておりますが。介護員さんがね、やっぱり、後(あと)補充がない、と。辞めたらね。これが困りますよねえ⁷。最後の1人まで[面倒を]見てくれるちゅうことになってるけど、はたしてそうなのかどうか、それもわかりませ

⁷ 補足の語り。「これから先、われわれみたいな不自由な者(もん)が、どうなるもんかなあと思ってね。やっぱり、不安ですよ。療養所、介護員が定年退職とかいろんなので辞めたりしたら、後補充を国がしてくれんからね。それで、困るんですよ。で、看護師さんが介護員の[欠けた]あれを、だいぶん手出しをしてくれるようなふうになっていくような調子ですよ、いまは。しかし、看護師さんはね、治療する立場のひとだから、その立場と生活の場と両方ちゅうのは、なかなか大変だろうなあちゅう思うんですけど。やっぱり、生活の場は生活の場で、ただ、御飯を持ってきて食わして、下膳(げぜん)をしてって、それだけじゃすまないわけね。掃除もしなきゃいかんし。もう、トイレからどっから。だから、そういうことをしながら、看護師も一日、2人も3人も休みがあったりすると、手が足らんくなって。だから、もし、突発事故で誰かが倒れるとか大変なことが起こったら、もう生活の場のほうよりそっちのほう、あん衆の、看護師の仕事だからね。看護師が生活の場のほうまでやって、治療のほうもするちゅうは、ちょっとおかしなやり方じゃないかなあと思うんですけど。園と国がどういう考えを持って、そういうふうになされるのかね。困ったですよ。わたしたち、いちばん不自由な者がいちばん困るんですよ。厄介なことになっていくような気がしますよ、これから。」

んよ。で、よその療養所と一緒にやあならんちゆう入所者（ひと）もおるしね。もういろいろですから、なかなか話がうまくまとまらないんじゃないですか。あたしなんか、ここにおってもう、こんな調子ですから、何がどうなってるのやわかりません⁸。

⁸ わたしたちは、語りをまとめたこの原稿を読み上げながら、原稿確認の作業を進めていったが、途中で、語りのまとめ方に対して、山口トキさんから疑問が出された。「先生にお尋ねしますが、いま、ちょっとわたしの鹿児島弁風にアクセントがなってるようですがな。本を作られるときは、そのまま書くんですか？ あたしなんかの鹿児島弁は、読むひとがわからんかもわからん。わたしが聞いてとっても、なんかおかしい。[もっと標準語に近づけて] もらいたい。[このままでは、わたしが] 笑われる。」

トキさんと相談の結果、トキさんが最も信頼を寄せている「ハンセン病問題の全面解決を目指して共に歩む会鹿屋」の松下徳二先生（高校の先生をしていただいたので、みなさん「松下先生」と呼ぶ）に、判断をゆだねたいということになった。松下先生にこの原稿を読んでもらった結果、「このままでいいのではないか」ということになった。おそらく、原稿を読み上げるわたしたちのイントネーションが、どうにも鹿児島弁にはなっていなかった点が、山口トキさんに違和感を抱かせたいちばんの原因ではないかと思う。

They Followed Me to the Deep Mountain to Persuade Me to Enter the Asylum: An Interview at Hoshizuka-Keiaien, a Hansen's Disease Asylum

Yasunori FUKUOKA & Ai KUROSAKA

This is the life story of a woman who spent almost 60 years in the asylum.

Toki Yamaguchi was born in 1922 in Kagoshima prefecture. She was confined to Hoshizuka-Keiaien in 1953. She got married in the asylum in 1955. On the last day of that year, she lost her sight by hot ashes from a brazier. She became one of the first plaintiff's group of the lawsuit for the unconstitutionality of the Segregation Policy.

In August 2010 when this interview was performed, she was 88 years old. The interviewers were Yasunori Fukuoka, Ai Kurosaka, Sajik Kim and Yuki Kitada.

Ms. Toki Yamaguchi found the first symptom of her disease when she was 19. After the war, the staff of the public health center visited her to persuade her to enter the asylum. At the beginning, it was a kind suggestion but later became aggressive and coercive. She asked her father to build a cabin for herself in mountain and stayed there to escape from the persistent threatening from the staff. One day a policeman came there, and said, "We will handcuff and arrest you if you keep refusing to enter the asylum." She asked her father once more to build another cabin in deeper mountain. However, the staff came there to hunt her and drove her to the corner. After all, she stayed in the cabin for 3 years. Although she was able to survive since her family brought food for her, it was a painful experience for her.

She got married to a blind man in the asylum 2 years after she was confined to the facility. Later her husband also became deaf and lost all modes of communication with other people. She took care of him almost every day in the hospital and finally found a method to communicate with him by writing *katakana* on his head with his hand. This effort gave her husband a hope to live and we were touched by this story.

She said that she became one of the first plaintiffs only by request from other people, but this kind of experience must have propelled her to be a plaintiff.

Key words: Hansen's disease, segregation policy, life story